

I. 三国志をより深く知るには

0 三国志を研究してみよう

三国志への興味の持ち方は、人それぞれに違うと思います。小説から、漫画から、あるいはゲームから興味を持った人も多いでしょう。せっかく三国志に興味を持ったのであれば、三国志を極めてみませんか。ただし、そのためには、順序よく三国志に関する学問の世界を知っていただく必要があります。

三国志について、とても興味深い考え方を持っている人はたくさんおられます。しかし、その着想が広く認められ、学会の共通理解になるためには、科学的な手続きが必要なのです。単なる思いつきではなく、資料に基づいたしっかりとした論証をして、それを三国志学会の機関誌である『三国志研究』に投稿してみる。本書は、そのような手続きの方法を説明していきます。この本により、三国志を極めてくれる人が増えることを願ってやみません。

1 三国志に関する概説書

三国志に関する研究は、近年ようやく盛んになってきました。2006年には、歴史・思想・文学を横断した総合的な三国志に関する学会である三国志学会が設立され、分野を超えた三国志の研究が開始されました。設立大会には、中国から三国演義研究の第一人者である沈伯俊四川大学文学院教授をはじめ多くの中国人研究者が参加し、劉世徳中国社会科学院教授には、「『三国志演義』^{かげい}嘉慶七年本試論」という講演をいただきました（『三国志研究』第二号に翻訳が掲載されます）。三国志学会は研究者以外にも広く開かれた学会ですので、どうぞ積極的にご入会ください。

三国志の総合的な共同研究は始まったばかりですが、三国志に関する一般読者を対象とする概説書は、古くから非常に多く出版されています。そのすべてを挙げることは不可能ですので、それらの中から、学問的に見てレベルの高いものを紹介していきましょう。

1-1 歴史

三国時代の歴史に関する概説書は、三国時代の歴史の全般を描いた概説書と個人の生涯を扱った伝記に大別されます。

1-1-1 三国時代全般の概説書

三国時代の全般を扱った概説書として、渡邊義浩『図解雑学 三国志』（ナツメ社、2000年）は、入手しやすい本です。図解により整理されていますので、三国時代の基本的な流れを簡単に理解できます。ただし、渡邊義浩は第二部で述べますように、『三国政権の構造と「名士」』（汲古書院、2004年）という現在日本で唯一の三国の歴史に関する研究書を出版し、「名士」論という独自の視角により、貴族制の成立期としての三国時代を捉えていますので、概説書にもその立場が反映しています。つまり、渡邊説の概説としては読みやすい本ですが、これだけが三国時代への分析視座ではないことに注意が必要です。

同様に、金文京『中国の歴史04 三国志の世界』（講談社、2005年）も、特徴のある概説書です。これも第二部で述べますように、金文京は日本を代表する『三国志演義』の研究者ですので、本書は歴史としての三国時代の概説書でありながら、随所で演義との比較が行われます。また、「三教鼎立の時代」、「文学自覚の時代」にそれぞれ一章が割かれているように、歴史だけではなく、儒教・道教・仏教の三教の三国時代における展開、建安^{けん}安文学^{あん}の自立性など、思想・文学にもきちんと目配りが行き届いた本になっているところも、本書の優れた点です。むろん、三国正統論から『三国志^{へい}平話^わ』・『三国志演義』と続いていく『三国志演義』の形成論という得意分野の優れた記述も見逃せないところです。

ただし、以上の二書は、ある程度の知識を前提として読むべき少し難しめの概説書といえます。もう少し平易な、読みやすい本としては、良質な概説書の提供で定評のある三国志学会会長の狩野直禎に、『「三国志」の世界—孔明と仲達』（清水書院、1971年）、『「三国志」の知恵』（講談社現代新書、1985年）、『三国時代の戦乱』（新人物往来社、1991年）があります。それぞれ、諸葛亮と司馬懿・現代との係わり・戦いの具体相に重点が置かれています。また、満田剛『三国志—正史と小説の狭間』（白帝社、2006年）は、最新の三国志に関する概説書です。

1-1-2 伝記

日本でも中国でも、三国時代の伝記的な関心は、諸葛亮と曹操に偏っています。日本では、劉備や孫権に関する本格的な伝記は、出版されていません。

諸葛亮の伝記としては、宮川尚志『諸葛孔明—「三国志」とその時代』（富山房、1940年→光風社出版、1984年）が最も優れています。丹念に集めた史料に基づき、諸葛亮像を復元していますが、そこには諸葛亮を「漢代の精神を把持しながら六朝的政治社会に生きてために悲劇的であった偉人」と理解する宮川の歴史観が貫かれています。六朝的政治社会とは貴族制のことであり、六朝貴族は王朝の興廢に関係なく永続的に家系を維持しました。簡単に言えば、君主に忠など尽くさないのです。ところが、諸葛亮は劉備に身を託して、官僚としての忠義を貫きました。時世の流れに遅れていたかに見えた諸葛亮は、のちにその忠厚質実な人柄と文章により、朱子など多くの人の崇敬的になったとします。ただし、書かれた年代からも分かるように、この本は初学者には少し難しいと思います。

狩野直禎『諸葛孔明』（人物往来社、1966年→PHP文庫、2003年）も、長く読み継がれてきた伝記です。平易な、それでいて深みのある文章を堪能することができます。なかでも、諸葛亮の伝記のハイライトである「出師の表」は、祖父である狩野直喜が中学生であった著者に、「勉強するように」と送った書き下し文をそのまま使っており、日本の中国学の開祖の

一人である狩野直喜の端正な訓読を今日に伝えています。

渡邊義浩『諸葛亮孔明—その虚像と実像』（新人物往来社、1998年）は、三つの諸葛亮像を掲げる本です。『三国志』の著者である陳寿は、諸葛亮の偉大さを描くことにより、西晋に生きる旧蜀漢系人士の登用を願いました。「亡国の民」と差別することはやめて欲しい。「蜀にも忠に生きた立派な丞相がいたのだ」と。すでに陳寿の偏向が入っていた諸葛亮像は、北方民族に中国が脅かされるたびに高められ、宋では王に、明では帝に、清では神格化されます。陳寿の諸葛亮像を確認したあとは、こうした『三国志演義』を頂点とする諸葛亮の虚像の歴史の変遷を時代ごとの史料を掲げて調べていきます。最後に、三国時代という歴史の中に諸葛亮を置いて、その実像を考えます。貴族の前身としての「名士」諸葛亮と劉備との関係は、「水魚の交わり」と表現されるような絶対的な信頼関係にはなく、権力をめぐる両者のせめぎあいが見られる、というのがその結論です。渡邊義浩『図解雑学 諸葛孔明』（ナツメ社、2002年）は、これを簡単にまとめたものです。

このほか三国志に関する好著の多い林田愼之助には、諸葛亮のみを描いた『諸葛孔明—泣いて馬謖を斬る』（集英社、1986年→集英社文庫、1991年）・曹操と諸葛亮を描いた『三国志 風と雲と龍—曹操と諸葛孔明』（集英社、1994年）があります。また、流麗な『三国志演義』の訳で知られる立間祥介に、『諸葛孔明—三国志の英雄たち』（岩波新書、1990年）があります。

曹操に関しては、石井仁『曹操—魏の武帝』（新人物往来社、2000年）があります。石井仁は、第二部で述べますように、三国を含む魏晋南北朝の軍事制度の専門家です。したがって、本書からは制度に関する正確な知識を得ることができ、また独自の曹操論の展開を楽しむことができます。なかでも、曹操の権力樹立過程を追う前半の記述は独創的で、他書の追隨を許しません。一方、堀敏一『曹操—三国志の真の主人公』（刀水書房、2001年）は、曹操の伝記を追いながらも、バランスの取れた全体像の記述と社会構造の変容の叙述に重きを置いています。なかでも、屯田制や税制である田租・戸調の意義の考察に優れ、魏晋南北朝を切り開く存在とし